

〈現場〉に出るとは何の謂か

フェリックス・ガタリにおけるメタモデル化の概念について

濱田 力稀

1. はじめに

フェリックス・ガタリ (Félix Guattari 1930–1992) は、ジル・ドゥルーズ (Gilles Deleuze 1925–1995) との三冊の共著で知られていると同時に、彼の遺したテキストの難解さで知られる人物である。この難解さは、彼自身が生み出した多くのジャーゴン (あるいは概念)、さらにそれらが由来している多くの学問領域、そして彼が持つ精神分析家/政治活動家/こういつてよければ哲学者という三面鏡のような肩書きに由来している。ガタリの書物を読んだことのあるものなら誰でも、意味をなしているかどうかすら判別できない用語の羅列にめまいを覚え、彼独自の図表に躓き、苦虫を噛みつぶしたような思いをすることだろう。

しかし同時に、ガタリの思考の多くが、政治活動やラボルド精神病院での臨床活動の只中で醸成され、展開されたものであることも事実である。このことが意味しているのは、ガタリの難解な思考の裏には、おそらくそのような状況に直面したことのあるものならば顔かすにはいられない、至極単純かつ素朴な問題と経験があるということである。したがって、ガタリを読むということは同時に、彼が活動していた〈現場〉での状況に自らを重ね合わせるということでもある。

そして、我々がここで主題とする「メタモデル化 (métamodélisation)」の概念も、決してその例に漏れるものではない。ガタリが1980年代後半に創造したこの概念もまた、ガタリ自身が述べているように、臨床の現場から生まれたものである (Guattari 1985: 49=25–26)。

しかしながら、なぜメタモデル化という、比較的マイナーなガタリの概念を取り上げねばならないのだろうか。我々はこの概念の中に何を見出すことができるのだろうか。ここで我々が立てるのは、メタモデル化の概念こそが、〈現場〉の真っ只中で問題となることを明らかにしてくれる、という主張である¹。そしてこのテーゼがたてられねばならないのは、私自身がその

¹ ここで筆者は〈現場〉という語を、大学などの哲学と呼ばれる営為が集結している場所ではなく、全く別の営為がなされている場所のこととして解している。それは以下で例示されるような病院であるし、あるいはガタリが身を置いていたような政治活動の場、そして企業や学校、NPOなどでもありえる。そしてこれらの〈現場〉は、そのような場としてひとまとめにしたとしても、非常にバリエーションに富んでいる。同じ病院でも外科と内科は全く異なるであろうし、同じ企業でも建築会社とコンサル会社とは全く異なるであろう。ただし、筆者として注目すべきだと考えているのは、このような多種多様な現場の大部分が〈営利組織〉、すなわち企

一端を担ってしまっている〈企業内哲学〉、あるいは昨今盛んな〈哲学対話〉といった活動のなかで、私自身が何をしているのかを自問するためであり、これらの活動に巻き込まれている人々が、自分のしていることを省察するための、一つの参照項を作るためである。したがってこの試みは同時に、我々が〈現場〉で行なっていることが果たして哲学であるのかという問い、すなわち我々の営みにおいて最も根本的な、「哲学とは何か」という問いでもある。

とはいえ、我々はガタリ概念を我々自身の活動に応用したいというのではない。あるいはむしろ、メタモデル化の概念そのものが、応用という形を許さないものであるのかもしれない。それは第一に、この概念が広い一般性や普遍性を持つものではないからであり、しかし第二に、この概念が現場で私たちの行なっている活動そのものについての〈メタな〉記述だからである。メタモデル化の概念は、現場で問題とならざるを得ない一つの具体的な問題を指し示しているが、同時にある特定の活動の具体的な記述ではないのだ。

以上を踏まえて、メタモデル化の概念について論じるために、ここでは以下の道筋を辿る。まずは、メタモデル化の概念をめぐる既存の研究を整理する（第二節）。残念なことに、メタモデル化の概念について主題的に論じているものは非常に少ない。しかしそこには確かに、ここでの議論にとって非常に有益であり、かつさらに深化させることのできる点がある。この議論を通して、我々は二つの論点を提示する。一つは、メタモデル化の概念が一般に「個人」を前提として受け取られているのに対して、この概念を「集合（collectif）」の領域でも受け取ることができるのではないか、という論点。もう一つは、メタモデル化の概念と近接している「共立性（consistance）」の概念ないしは問題と対応するものとしてメタモデル化の概念を読むことができるという論点である。ここでは、これまでの論者はこの二つの論点を暗黙の内に前提しているということを証する。次に、ガタリ自身のテキストを注釈することを通じて、メタモデル化の概念を明らかにすると同時に、それが集合と共立性という二つの概念に対応している問題を指し示すものであることを確認する（第三節）。そこで明らかになるのは、メタモデル化の概念は個人や集団（groupe）にのみ限定されるのではないということ、そして共立性という概念とそれが指し示す状態こそ、メタモデル化の概念が生産するものだということである。そして最後に、ガタリ自身の実践記述と並行して、具体的な現場での活動から共立性の問題を描き出した人物として、オランダの人類学者であるアネマリー・モル（Annemarie Mol 1958-）を取り上げる（第四節）。ここで彼女を取り上げるのには二つの理由がある。第一に、モルの記述を通して、ガタリに不足している〈現場〉で起きている事象の記述を補完することができるように思われるからである。モルは『ケアのロジック』において、病院での看護活動の記述を通

業に含まれるという点である。この点では、同じ大学であっても私立大学は企業である。さらに言えば、たとえ企業でなかったとしても、貨幣を抜きに考えられるような現場などほとんどないという現実前提されねばならないだろう。このようなことをあえて指摘するのは、〈現場〉に出ることには貨幣を対価として受け取ることがしばしば付随するからである。哲学研究者が哲学をある種〈売り物〉にし、それによって金銭を得ることを快く思わないものもいるだろうが、その批判は大学教員にも等しく向けられてしかるべきだろう。

して、そこに共立性（モルの用語ではロジック）の問題があるということを鮮やかに描いている。ガタリとモルの間のこの問題の共有が第一の理由である。そして第二に、ガタリとモルはそれぞれ異なる場所と分野であるとはいえ、彼らが同じ「病院」という〈現場〉にいたからである。これら〈現場〉間の親近性は、ガタリとモルの間に大きな不整合を生むことを防いでくれるであろう。このような理由で、モルの記述は、ガタリのテキストを逆求的に読むことに適したものであると筆者には思われる。ここでは、ガタリとモルの記述によって、これまで論じたことが〈現場〉の水準で見出される。最後に、これまでの議論を踏まえて、〈現場〉において一つの共立性を発見すること、新たなそれを創建することこそが、〈現場に出る〉ことの一つの謂であると結論づけ、同時に今後の課題を提示することで本稿を終える（結論）。

2. メタモデル化をめぐる言論空間

メタモデル化の概念をめぐる言論は、一つの主流のなかで捉えることができる。それは、精神分析、あるいはより広く構造主義と呼ばれる潮流における「構造」への反発として、さらには精神分析と資本主義社会の結託への反発としてメタモデル化の概念を捉えるものである（Watson 2008; Watson 2009; O'Sullivan 2010; 香川 2023; 有馬 2024; 井上、清水、米山 2008）²。そこに通底しているのは、資本主義や精神分析が課すモデルに対して、それとは違うモデルの様式を生産しなければならないという問題意識である。たとえば Janell Watson（2008; 2009）は、ガタリが『機械状無意識』において前面的に展開した記号論や言語学に関する議論を引き受け、それをラカンのサイバネティクス受容と対比させることで、メタモデル化が精神分析を含む構造主義に対するカウンターであるということ、そして『アンチ・オイディプス』で提示された「スキゾ分析（schizoanalyse）」の変種であることを主張している。そして Simon O'Sullivan（2010）は、Watson とは異なってメタモデル化が持つ美学的な含意に着目し、それをミシェル・フーコー（Michel Foucault 1926–1984）の「生存の美学（esthétique de l'existence）」の「アップデート」として捉え、構造主義や資本主義が課してくるモデルとは別のモデルの生産としてこの概念を解している。また有馬は、メタモデル化の概念を構造主義との対決として直接的に読んでいるわけではなく、むしろルイ・イェルムスレウ（Louis Hjelmslev 1899–1965）との関連でその内実を明らかにすることに重点をおいている。しかし、イェルムスレウの言語学が、従来の構造主義言語学や構造主義記号学からの離反としてガタリとドゥルーズに取り上げられているという事実から、他の論者と同様に構造主義との対決としてメタモデル化を論じるものと捉えることができるだろう。そして井上らの仕事は、メタモデル化の議論を情報学の観点から取り上げるものであり、Watson と近い立場にある。彼らはガタリが実際に参照していたウンベルト・マトゥラーナ（Humberto Maturana 1928–2021）らの「オートポイエーシス（autopoïèses）」の議論を

² 香川は、メタモデル化を近年のオープンダイアログなどの活動と結びつけることで、それが持つ「物語化」の機能を強調するものであり、この意味で独特の立場をとっている。

構造主義と対立するものとして論じている。このように、メタモデル化について論じている人々は、その着眼点こそ異なれど、精神分析を含む構造主義、そして資本主義へのアンチテーゼとしてメタモデル化を読む点で共通している。

対して本稿はこれらの先行研究とは異なり、彼らが共通して前提している二つの論点を指摘することで、メタモデル化の概念の持つ〈現場性〉を描く。第一の論点は、メタモデル化がある一人の個人においてのみ当てはまるのかどうかというものである。Watson や O'Sullivan、そして日本での先駆者全員が、メタモデル化を一つのオートポイエーシスとして、すなわち「自己-生産 (auto-production)」とみなしている点で一致している。そしてこの一致は主に、ガタリのテキストが精神病者の治療を例に挙げていることと並行して、ある個人において起こるものであると了解されている。しかしながら、メタモデル化がスキゾ分析と密接な関わりを持つものであり、またスキゾ分析がその前身とも言える制度論的精神療法(thérapeutique institutionnelle)の発展形であるならば、後者が患者だけでなく彼らが浸っている環境、すなわち制度(あるいは機関)をも分析するという点で、メタモデル化も個人にのみ限定される概念ではないのではないか。

そして第二に、先に挙げた論者は、個人にしろ集団にしろ、それらを構成する異質な諸部分がある種のまとまりを保っているという点にそれほど注意を向けていない。自己-生産と一口に言っても、我々の身体や精神、そして組織体はそもそも、異質な諸部分がなぜかまとまることによって一つの個物としてあり続けている。ガタリが言うように(Guattari 1985: 29=25-26)、メタモデル化が「既存のモデル全体あるいはその一部を我有化する」ことであるならば、さまざまなモデルから持ち込まれたそれら諸部分を何らかの形で一貫させることが問題となるはずである。しかしながら、本稿ではこの共立性の発生の問題に取り組むことはできない。なぜなら、共立性の発生を論じるには、ガタリの複雑な存在論に足を踏み入れる必要があるからである。そのため本稿では、共立性の発生よりも、メタモデル化が共立性にいかに関わるのかを明らかにするにとどめたい。

以上の二つの論点は、これまでの論者が暗黙のうちに前提しているが、メタモデル化の概念を明確化する上で避けては通れない論点であるように思われる。そこで次節では、ガタリのテキストを実際に読んでいくことを通じて、ガタリ自身からこれら二つの問題を取り出すを試みる。

3. メタモデル化とその二つの問題

メタモデル化という概念が出現するのは、ガタリが逝去する前の約10年の間である。管見の限り、『闘走機械』に収められている1981年のテキスト、「機械的時代と無意識の問題」(Guattari 2009: 141=121)においてその萌芽が見られ、大々的に展開されるのは1984年ごろにガタリが行っていたセミナーからであると思われる(Guattari 1984)。ガタリはこの時期以降、メタモ

デル化という概念をその死まで用いることとなる。したがって、ここでのコーパスは必然的に1984年以降に絞られる。加えて、この概念がまとまった形で扱われるものにさらに限定すると、1989年の『分裂分析的地図作成法』と『三つのエコロジー』、1992年の『カオスマーズ』の三つの著作となる。この三つの著作、とりわけ『分裂分析的地図作成法』はガタリ独特の言い回しが頻出し、難解であるが、以下では主にこの三つの著作に依拠して議論を進める。

3.1. メタモデル化とは何か

まず、メタモデル化の概念の定義を確定させておく必要があるだろう³。ガタリは随所でさまざまな定義をこの概念に与えている。まず、比較的早い段階で与えられた定義が『精神の管理社会をどう超えるか?』に見出される。

この時期から、私の考察は、私が今日メタモデル化と呼ぶ手続きに向けられていました。つまり、既存のモデル化の超コード化として設立されるものではなく、むしろ既存のモデルの全部あるいは一部を奪い取る「自己モデル化 (automodélisation)」の手続きとして設立されるもののことです。それは、自らの地図作成法を建設し、自らの標識を作成するためであり、したがって自らの分析的な感じ=接近 (abord)、自らの分析的方法論を建設するためです⁴。(Guattari 1985: 29=25-26) (太字は原文イタリック)

ここでは、メタモデル化は自己モデル化の手続きとして定義される。それは、「メタ」という接頭辞の持つ、〈下支えすること〉や〈超え出ること〉といった意味を持つのではない。むしろ既存のモデルを参照しつつもそれを独自のものとして我有化し、自らに固有の分析的方法論を作るためのものである。このような意味で、メタモデル化は「自己モデル化」である。

さらに、『分裂分析的地図作成法』と『カオスマーズ』には、両者に共通する定義が見られ

³ 反対に、モデル化とは何かという問いには、Watson (2008) がうまく答えてくれるだろう。Watson はモデル化という語に三つの含意があるとし、それを次のようにまとめている。すなわち、①「モデルは家族、制度=機関、社会的-政治的体制から疑いなく引き継がれた、振る舞いの学習されたパターンであり、それは最後には支配的な社会秩序によって課される、慣行により認められた規範として機能する」。②「社会科学に対応するとき、モデルは地図を書くプロセスと配置 (configuration) という意味である」。③「反復されるパターンあるいは骸骨のような青写真というモデルの三つ目の定義を加えるべきだろう。——言い換えると、構造としての定義である」(Watson 2008)。なお、本稿での外国語文献の引用は本稿筆者のものである。既訳がある場合には参照し、適宜変更を加えた。

⁴ この一節での冒頭に出てくる「この時期」とは、その前の文脈でガタリが「制度論的精神療法」について語っていることに鑑みると、ガタリがラポルド精神病院に勤め始めた時期のことを指していると思われる。それは早くも1955年ごろのことである。このことは、ガタリ研究にとって重要なことを示唆している。すなわち、1955年ごろのガタリが発案した「横断性 (transversalité)」の概念とメタモデル化の概念の連続性である。

る。それぞれを書き出すと次のようになる。

私は、スキゾ分析の野心はもっと控え目で、もっと大きいものであるべきだと考える。もっと控え目というのは、このスキゾ分析は、いつかは真に実在しなければならないとしても、萌芽的な仕方では多様な様相で、**いますでに少しばかりいたるところに実在している**からであり、正式な制度的基盤をまったく必要としないからである。もっと大きいというのは、私の見解では、スキゾ分析には**モデル化の他の体系を讀解する**学問領域(discipline)になるという使命があるからである。ただしそれは一般的なモデルという資格ではなく、さまざまな領域におけるモデル化の体系を解読する器具としてであり、換言すればメタモデルという資格である。(Guattari 1989: 27=33-34) (太字は原文イタリック)

精神分析やシステム論の理論の科学性を自称する内容は(神話的あるいは宗教的モデル化、さらには体系的な妄想の神話的モデル化と同じ資格で)、それらの実存化する機能、つまり主観性を生産する機能によって本質的に価値を持つ。これらの状況においては、理論的な活動は、モデル化の体系の多様性を説明することのできるメタモデル化に向けて再度方向づけられるであろう。(Guattari 1992: 39-40=39-40)

以上の二つの引用に共通するのは、メタモデル(化)が他の既存の体系を讀解し、解読し、説明するという役割が歸されている点である。前者の引用では、スキゾ分析がモデル化の他の体系を讀解する器具として説明された上で、それが「メタモデル」と言い換えられている。そしてこれは、先に提示した一つ目の引用と同じように、一般的なモデル(あるいは超コード化された、あらゆるモデルを束ねる一つのモデル)としてあるのではない。後者の引用においては、また別の用語と用いられながらメタモデル化が説明されているが、そこでの定義は「モデル化の体系の多様性を説明する」とされている点で、前者の引用と共通している。

しかしながら注意しなければならないのは、この二つの引用において「メタモデル」と「メタモデル化」という微妙に異なる表現がなされている点である。このことについて、Watson と O'Sullivan は、前者の引用においてスキゾ分析がメタモデルと言い換えられていることに立脚し、スキゾ分析とメタモデル化をシノニムとして扱っている。しかしながら、ここで言われているのはスキゾ分析=メタモデルであって、スキゾ分析=メタモデル化ではない。本稿ではこの微妙な差異を保存する立場を取り、スキゾ分析=メタモデルを引用の通り「モデル化の他の体系を讀解すること」と解し、メタモデル化をその接尾辞(-sation)が持つ発生的な意味合いを考慮して、〈複数のモデルを合成して共存させること〉と解したい。

さて、以上の三つの引用を総合すると、メタモデルおよびメタモデル化はそれぞれ次の特徴を持つものとして定義される。まずメタモデルとは、①既存のモデルを参照する上で、それら多様なモデルを解読し、説明するもの。そしてメタモデル化とは、②既存のモデルを参照しつ

つも、それをすべてあるいは一部我有化することによって、新たな固有のモデルを作成すること、である。

3.2. 自己／集団の問題

このようなメタモデル化の定義は比較的シンプルであり、理解しやすいものである。しかしながら、ガタリがメタモデル化に与えている記述はこれにとどまらない。彼は『分裂分析的地図作成法』以降、この概念を存在論的な水準にまで拡張させていくこととなる。この拡張にこそガタリを読む上での最大の困難が存しており、さらに本稿冒頭で提示したメタモデル化が孕んでいる二つの論点、すなわち個人／集団と共立性をその根底から明らかにするには、この困難な部分を通らずに済ませることはできない。しかしながら、本稿でそのような大掛かりな作業を遂行することは、筆者の技量と紙幅を大きく超えたものである。そのため、ここでは存在論という〈メタな〉次元ではなく、提示した二つの問題を明らかにするという〈表層〉の読解で満足したい⁵。

まずは第一の問題から取り掛かりよう。すなわち、メタモデル化は個人のみを前提としているのか、あるいは集団やその他の諸々の次元にも関与するのか否かという問題である。この問題は比較的容易である。それはガタリが、個人と集団を、あるいはそれらを構成する数多くの要素を切り離すことは不可能であると、随所で述べているからである。

代表的なのは『カオスマーズ』第三章、「スキゾ分析的メタモデル化」における記述である。ここでガタリは、スキゾ分析の実例として、彼が勤めたラポルド精神病院の調理場について記述している。ガタリによると、ラポルドの調理場は病院のサブ・ユニットである。病院全体と同様に、調理場も非常に多くの要素が混交し合いながら一つのまとまりをなしている。たとえば、メニュー係、活動記録係、ケーキを焼くアトリエ、あるいは温室や菜園バー、さらにスポーツ、患者のことで調理人と医師がもうける寄り合いなどである。そしてそのような調理場には、雑談をするものや踊るもの、調理場にあるものを楽器に見立てて歌うものなど、さまざまな行為をしている人物がいる。このような情景の中に、ガタリは「集合的なもの (le collectif)」という、個人でも集団でもない、さらには人間であるとも限らない次元を見出している。

⁵ なぜ本来であればここでガタリの存在論が必要であるのかを軽く論じておきたい。ガタリの存在論の要点は、〈境界線のはっきりした個物は存在しない〉というものである。この存在論は、〈個人〉や〈意識〉、〈客観的世界〉を前提とする近代哲学と袂を分かっている。個物の境界線自体が不分明であるという前提に立つとき、そこには否応なく共立性の問題が立ち上がってくる。すなわち、ある個物が個物として成立するための原理の問題が発生するということである。たとえば、スピノザが『エチカ』第二部定理十三からの一連の公理と補助定理がそうである。とりわけガタリにおいては、彼の熱力学への関心、後年の複雑系の議論への参照などにそのような姿勢が現れている。そして1970年代後半から1980年代にかけて、そのような姿勢は「分子 (moléculaire)」と表されることとなる。また、このような姿勢は後で取り上げるモルにも通底する。ガタリにおける存在論についての詳細な研究としては、O'Sullivan (2010) と、Carlos A. Segovia (2024) を参照されたい。

ここでは、集合的なものは、集団的なものと同義ではない。一方では人間の主観性の諸要素を包摂するだけでなく、他方では感覚可能なモジュール、前個人的な認知のモジュールを、そしてミクロ社会的なプロセスと社会的な想像力の諸要素を包摂する形容である。それは同じ仕方で、人間的でない、機械的、技術的、経済的な主観的形成にも作用する。したがってこれは、異質発生的な多数性と等価の用語である。(Guattari 1992: 100-101=114)

このように、ラボルドの調理場という〈現場〉は、個人と集団という古典的な二項対立にとどまるものではない。そうではなく、さらに広範な諸要素（メニュー係、活動記録係、ケーキを焼くアトリエ、あるいは温室や菜園バー、さらにスポーツ……）をも巻き込んだ場である。これをガタリは「集合的なもの」と呼んでいる。したがって、スキゾ分析あるいはメタモデル化の現場には、個人や集団だけでなく、さらに雑多な異質な諸要素のまとまり、すなわち「集合」がある。

以上で第一の問題には答えることができたであろう。すなわち、メタモデル化は、個人の次元にのみとどまるものではないし、それに対立するものとしての集団的な次元にとどまるものでもない。メタモデル化は、個人や集団をも包み込む、より広範な「集合的次元」に関わるものである。

続いて第二の問題に移るときである。我々はいま、メタモデル化が個人的なものにのみ関するのかどうかについて見てきたが、第二の問題は以上の議論から派生的に引き出される問題である。ラボルドの調理場には種々雑多な要素が巻き込まれつつも、それは調理場として機能している。このことが示すのはつまり、ラボルドの調理場がただ乱雑で無秩序なわけではないということである。では、メタモデル化の概念は雑多で異質な諸要素のまとまり（共立性）とどのように関連しているのだろうか。

3.3. 共立性の問題

すでに述べたように、ここでは共立性の発生について論じることはしない。その代わり、ここでは、ガタリがメタモデル化としてのスキゾ分析に、共立性をめぐると一つの役割を明示的に示しているのを確認し、メタモデル化と共立性の関連を明らかにする実践的読解にとどめたい。以下はラボルドの調理場の記述に続くテキストである。

もろもろの橋が、共立性を宇宙（Univers）の一定の構成要素に与える媒介によって、あるいは前もって実在していない他の集まりによって、（また、主体にとってはまだ前代未聞の表現の素材の入り口によって、たとえば造形芸術、ビデオ、音楽、演劇、あるいは全く単純に……料理！）精神病者に向かって投げられるということもありうる。スキゾ分析的

な地図作成法は、共立性あるいは実在＝実存を欠いている構成要素を識別可能にすることに存するであろう。しかしそこでは、本質的に不確定な企図が、連続的な創造が重要である。それは前もって確立された理論的ないかなる支えの恩恵も浴するのではない。同じ例にとどまると、ラボルドの調理場の言表行為の創発は、時間における保証なしに、部分的な分析者の役割を担うようその企図を導く。そのような審級のオートポイエーシスの特徴が、アジャンスマンの永続的な再開＝修復、非シニフィアンの特異性——手に負えない患者、解決できない葛藤——の受容能力の確認、そして外部への横断的な開放の絶え間ない再調整を呼びかける。(Guattari 1992: 101=115)

この一節は、主に二つの部分に分けることができる。第一の部分は、スキゾ分析が共立性（まとまり）を欠いている構成要素を識別可能にすると述べられている部分までである。ここでは、精神病者の内的世界（宇宙）の構成要素に一定の共立性を与える橋が投げられうということが述べられており、スキゾ分析的な地図作成法（メタモデル化）の役割は共立性を与えるというよりもむしろ、共立性を欠いているものを明らかにすることにあると主張される。残りの第二の部分では、そのようなスキゾ分析には前もって確立された、安定した理論的基盤がないということが述べられる。それゆえに、スキゾ分析を行なうものは、その都度新たに目の前の集合と対峙しなければならない。このことが意味しているのは、分析者はある集合が保持しているまとまった部分（アジャンスマン）を修復し、必要であればそれを取り巻く諸々の要素へとアジャンスマンを開放し、そこで新しい共立性を再発明し続けなければならないということである。この作業が再調整と呼ばれている。

以上の議論から、メタモデル化の意味するところがより明確になったように思われる。メタモデル化とは、現場においてどの要素が共立性を欠いているのかを分析し、共立性を欠いているアジャンスマンの調整をその都度行なうことである。そしてメタモデル化のこの任務は、決して個人的な水準や集団的な水準だけでなく、むしろさらに広い集合的な水準で行われる。そしてガタリは、ラボルドという現場でこのような〈実践〉を行っていた。つまり、医師、看護師、患者だけでなく、病院を支える数多くのスタッフ、病院にある多くの事物が相互に作用しあうことで初めて、ラボルドという病院はその機能を果たし始める。患者は医師や看護師だけでなく、他の患者や病院スタッフ、調理場のゴミ箱などと相互に関係を結ぶことで生き、治療に向かっている。そのためには、病院という現場を構成する限りなく多くの部分が、病院として機能するための配置（アジャンスマン）につかなければならない。しかしそのようなアジャンスマンは非常に流動的であり、壊れたり新たに作られたりする。したがって、そこでのスキゾ分析家＝メタモデル化を行なうものの任務とは、このような不安定なアジャンスマンを調整し続けることであり、どこに綻びが生じているのかを理解し、新しいアジャンスマンを創建することである⁶。

⁶ 一方で、病院という現場にいる医師や患者もまた、自らを構成する限りなく多くの部分で構成されているの

とはいえ、〈現場に出ること〉におけるタスクの一つであるメタモデル化の議論を解するには、ガタリの議論には現場についての記述が乏しい。そこで、ガタリの言うメタモデル化＝スキゾ分析を実際に行なったと言えるものを参照することで、この記述の不足に代えたい。それがオランダの人類学者、アネマリー・モルである。これによって、これまで追ってきたガタリの議論がより一層明瞭に理解されるであろう。

4. もう一つのメタモデル化——アネマリー・モルのフィールドワークから

本稿は、ガタリとモルという直接的な関連を見るのが難しい二者を繋ぎ合わせて論じようとしている。そのため、ここから先の議論は一見すると〈アクロバティック〉に見えるであろう。実際、これから参照することとなる『ケアのロジック』のプロローグにおいて、モルはこの本が「『ケアのロジック』と『選択のロジック』という、病気に対処する二つの方法を比較していく」（Mol 2008: ix=19）と述べており、本稿の主題とは一見すると無関係な議論を行なっている。しかしそれでも、モルが描き出す「ケアのロジック」は、ガタリのメタモデル化と共鳴するように思われる。

4.1. モルにおける〈集合〉と〈共立性〉の問題

我々は〈現場に出ること〉を論じるためにメタモデル化の概念に着目した。その上で主眼となるのは、〈集合〉と〈共立性〉という二つの問題であった。したがってここで問題となるのは、モルのなかに個人／集団の対よりもさらに広範な、ガタリが〈集合〉と呼んでいるものが見出されるのかどうか、そして〈共立性〉の問題が見出されるのかどうかである。

端的に言って、モルは明らかに〈集合的なもの〉と〈共立性〉について論じている。その証左となるのは『ケアのロジック』第二章「消費者か患者か」である。そこでは、糖尿病患者のケアの場面で、市場の「選択のロジック」が働いていることが示されている。糖尿病を患っている人々が持ち運ぶことのできる、ユーロフラッシュ社のテストストリップという道具をめぐって、患者が商品を選ぶという選択のロジックと、それと異なるケアのロジックの二つが並行していることが描かれる。このような具体的な議論を通じて、モルはこの章の末尾に、本稿に

であって、その限りで彼らもまた、自らのアジャンスマンに配慮する必要があるであろう。ここでは、病院という現場に含まれている一人の人間が自らのメタモデル化を行なうものであると同時に、その人間を取り巻いている病院という現場をメタモデル化するものであるという、ある種の再帰的な関係が見出される。このような意味で、メタモデル化は二重に「自己モデル化」と言うことができるであろう。このような論点は、ガタリが影響を受けたグレゴリー・ベイトソン（Gregory Bateson 1904–1980）の議論や、マトゥラーナらの「オートポイエーシス」の議論と結びつく。重要なのは、特にマトゥラーナらとは異なって、ガタリが有機体以外にもこのオートポイエーシスを見出しているという点であろう。このことについては稿を改めて論じたい。

において決定的な一節を置いている。

市場版の選択のロジックにおいては、消費者はターゲットグループに分割される。このことは、製品を潜在的な購買者に適合させることを可能にし、効果的に彼らに広告することを可能にする。[……] ケアのロジックにおいては異なる。要点は、ヘルスケアの実践が人々をカテゴライズすることを控えるということではない。[……] しかし、診断上のカテゴリーは、人びとが何を欲しがっている傾向にあるのかにではなく、人びとが何を必要としているかもしれないのかにもとづいている。さらに、日々のケアの実践においては、これらのカテゴリーは崩壊する。地に足の着いたケアは、特定の状況における特定の個人の特定の問題に関係している。ケアの技法は、ある人の状況を改善したり安定させたりするために、どのように（医療専門家、薬剤、機械、病気とともに生きる人々や関係している人びとといった）多様なアクターを最も良く協働させられるのかを把握することに関わっている。何をすべきで、それをどのように共有すべきなのか。ケアのロジックでは、患者はターゲットグループではなく、ケアチームの重要な一員なのだ。（Mol 2008: 26=67）

以上の一節から明らかなように、モルはまず個人や集団より広範で横断的な、ガタリが「集合」と呼ぶ次元で議論を行なっている。ケアの現場（病院）には、医師、看護師、患者のみがいるのではない。そこには薬があり、病気を診断したり治療したりするための機械があり、もっと言えばそうした機械を作っている人々、そうした機械を売っている人々なども絡み合っている。このように考えると、〈病院〉と呼ばれるものは確かに〈病院〉という個物としてあるのだが、どこからどこまでが〈病院〉であるのかは定かではない。このような意味で、モルは「集合」について語っている。第二に、モルは現場での問題が、集合と称される相互に異なる事物を「最善の方法で協働させる」こと、「どのように協働させられるのかを把握すること」にあると指摘している。すなわち、非常に流動的で境界線の不分明な病院という現場において、異なる事物を共立させるといふ共立性の問題を指摘している。したがって、モルはガタリに劣らず、優れて〈集合〉と〈共立性〉について語っている。

このように、ガタリとモルを結びつけるのは決して突飛なことではないし、このように読むことに大きな不整合もないということが示されたであろう。加えて、集合という次元でことを運ぶという両者の共通点は、先の引用から一層明確になったのではないだろうか。とはいえ、まだ論点が二つ残っている。それは第一に、モルがそこでメタモデル化を行なっているといえるのかという点、そして第二に、そのメタモデル化はどのようになされるのかという点である。ここで鍵となるのは、モルの言う「ロジック」である。

4.2. メタモデル、あるいはロジックの分析と作成

モルは「選択」と「ケア」の二つのロジックについて語っている。ではそもそもロジックとは何か。〈現場〉というその都度状況の変化する柔軟な場とロジックという堅固さを帯びた言葉は、一見すると相反しているように見える。モルはこのことに気を払いつつ、彼女自身がロジックという語を伝統的な意味合いからずらしているということを主張する。

私は、「ロジック」という言葉を哲学から借用し、持ち逃げした。実践について語るさいに「ロジック」のような言葉を使うのにはリスクがある。これらの実践が非常に一貫しているために、そのうちにあるすべてが他のすべてによってきっちり定義されていると示唆しているように見えるかもしれない。そうではない、ということは強く主張しておきたい。予期しないことはつねに起こる。いかなる実践にも、たくさんの創造性が巻き込まれている。しかし、局所的には、あるものは他のものよりも理解されやすい。複数の出来事のあいだには親和性があり、どういうわけか、うまく組み合わせられる傾向にある。「ロジック」という言葉で伝えようとするのは、そういうことだ。(Mol 2008: 9=40-41)

モルはここで、「ロジックという言葉は哲学から持ち逃げした」と述べる。それは、モルが西洋哲学のもつ意味とは別の意味でロジックという言葉を使おうとしているからである。モルによると、ロジックとは「推論の合理的な規則を定式化するために求められる」ものであり、「最初の前提から正当な結論を演繹的に導き出すための規則」(Mol 2008: 100=211)である。しかしながら、この伝統的なロジックの意味は、そのロジックの持つ複数の実践が一貫しているということ、それぞれの実践がきっぱりと定義されているというミスリードを引き起こす。それにもかかわらず、モルはあえて「ロジック」という言葉を選んでいる。それは一体なぜなのか。モルは「言説 (discourse)」の語とロジックを区別しつつ、ロジックの語をさらに正確化することでこの問いに答えている。

しかしながら、私はここでは「言説」や「秩序化の諸様式」ではなく、意図的に「ロジック」という言葉を用いる。なぜなら、どのように社会的-物質的な秩序化が生じ、成立していくのかや、そのプロセスにかかわる権力に関心があるわけではないからだ。そのかわりに、合理性を、というよりは私が研究している実践の合理的なものを追っていく。ここでは「ロジック」という言葉が役に立つ。この言葉は、スタイルと呼べるような何かと共鳴する。また、ある場所や状況で何をすることが適切だったり論理的だったりするのかを探索するよう誘う。そして局所的で脆弱であるが、それでも適切であるような一貫性を求める。この一貫性は、必ずしも巻き込まれている人たちにとって自明ではないし、彼らにとっては言語的に手に入るものですらない。それは暗黙のもので、実践や建物や習慣や機械に埋め込まれている。それでも、我々がそれについて語りたのであれば、ロジックを言語に翻訳する必要がある。だから、洞察を得る一つの方法としてコントラストを用いな

がら、比較的私にはそれを追っていく。(Mol 2008: 9-10=41-42)

すなわちロジックとは、現場でなされる多数の実践の論理的根拠である。多数の実践はその都度の状況に応じてなされるため、柔軟で流動的である。にもかかわらず、それでもそこには何らかの一貫性、まとまりがある。これをモルはロジックと呼んでいる。しかし、このロジックは現場にいる人々に必ずしも自覚されているものではない。むしろ暗黙のうちに、そこにある様々な事物のなかに、人々のなかに埋め込まれているものである。モルはこの不透明な捉え難い何かについて語ろうとしている。モルはそこでロジックを分析し、析出しようとしているのである。多数多様な事物や人々がおこなっている〈集合〉とそれが作っている〈共立性〉を分析すること。この意味でモルが行なっているのは、まさしくガタリがモデルの分析、つまりスキゾ分析＝メタモデルである。

4.3. メタモデル化を行なう現場の人々

このように見ると、モルは現場に一つの一貫性＝共立性があるということ进行分析しているのであって、モル自身がメタモデル化をしているのではない。この場合、メタモデル化を行なっているのは、現場で実践を行なっている人々自身である。そのため、以下では現場にいる人々がいかにメタモデル化を行なっているのかを、具体的な場面を提示しつつ見ていくこととする。

モルは『ケアのロジック』第四章、「管理と手直し」において、本稿に有益な事例を提供してくれている。そこでやはり重要なのは「手直し (doctoring)」である。モルはこの事例として、彼女が「ゾーマーさん」と呼ぶ糖尿病患者の例を取り上げている。この人物は、モルがフィールドワークをしていた当時、新しく糖尿病と診断された患者である。そのため、糖尿病であるとはどういうことなのかをうまく把握しきれていなかったのだが、一ヶ月ほど経って糖尿病と共に生きることに慣れてきた。インスリン注射の打ち方を学び、食生活を改善した。そのタイミングで、医師からより厳密な制限を提案される。それは一日五回、自分で血糖値を測るというものである。それを記録につけて診察時に持参すると、医師は処方するインスリンの量をより適切に判断することができる。彼はこの提案を受け入れ、挑戦することにした。

しかし次の検診時、この人物の記録はほとんど空白であった。この人物は実はこれを望んでいなかったのだろうか、それとも一日五回の測定が「難しかった」のだろうか。事実は後者の理由であった。仕事上、一日五回の測定を行なうことが難しかったのだ。そこで医師と看護師は、測定をしなかったことを責めるのではなく、〈うまくいく方法〉を探そうとする。患者とのヒアリングを通して、どうすれば測定という営みとその患者の生活を共立させることができるのか。看護師が提案したのは、一週間のうち五日にわたって一日一回の測定を試すというものである。このような記述のあとに、決定的に重要な一節が挟まれる。

テクノロジー、日々の習慣、人々の技能や生まれつきの性向がすべてなんとかお互いに調整 (adjust) されなければならない。これがケアのロジックにおいて重大である。すべてをすべてに同調させる (attune) ことが重要だ。完全に固定されたものや完全に流動的なものはない。テクノロジー、習慣、希望、患者の生活のすべてを調整することになるかもしれない⁷。(Mol 2008: 53=122) (傍点は引用者)

医師と看護師は、患者と日々の生活、測定器というテクノロジー、医師や看護師が発揮する技能やその人の持つ性向を調整し、その場での最適を創造する。それは一度きりではなく、継続的に、継続的に行われるものである。その患者に一日一回の測定を提案した看護師は、その記録帳に変更を加える。患者は測定を継続できるか実験する。そして成功しなければ、また診察室で話し合うのである。これが「手直し」である。

手直し (doctoring) は、医師 (doctor) だけがするものではない。ケアを行うチーム全体がかかわっている。[……] 手直しに関して重要な問いは、誰が責任者かということではなく、さまざまな活動同士がうまく同調しあっているかということである。すべてが、みんなが協調しているのか、それとも緊張や衝突があるのか。看護師は、患者が日常生活で直面している困難について学ぶために、もっと話を聞く時間をとるべきかもしれない。患者の経験に注意を向けることで、医師は自分の活動をよりよく同調させることができる。改善の余地はつねにある。理想化された実践ですら、理想ではない。大事なのはいろいろ試してみることで、すでになされたことに進んで立ち戻ってみることだ。失敗するものは常にある。もう一度やってみて、調整して、改善する。あるいは、その時がきたら、手放す。(Mol 2008: 56=127-128)

〈現場〉にいる医師や看護師は、そのケアが調和しているのか、何が調和していないのかを確認し、そこにあるズレをその都度再調整し続ける。そのような営みには、はっきりとした理想などないし、理論的基盤があるわけではない。そのようなまとまりを支えているのは、ケアに向かうロジックであり、その実践の論理的根拠である。これはまさに、理論的基盤なしに共立性を欠いているものを分析にし、それを再調整し続けるという、ガタリがメタモデル化と呼んでいるものに他ならないのではないか。このように、モルの場合にメタモデル化を行なっているのは、モルではなく現場の医師であり看護師である。

以上のように、モルはガタリがメタモデル化と呼んでいるものを見事に描いているように思われる。しかし、ここで次の疑問に答えなくてはならないであろう。すなわち、モルが描いて

⁷ ここでは、再調整の機能がケアのロジックに帰されているように見えるが、企業の論理たる選択のロジックにおいても、それがロジックである限りで再調整の機能が働くはずである。なぜなら、ロジックとは複数の実践の論理的根拠であり、そことの関係で複数の実践の一貫性を保持することが図られるであろうからだ。

いるのは確かにメタモデル化であるかもしれないが、しかしそれはロジックを創建しているわけではないのではないかと、ということである。この疑問には二つの仕方で答えることができる。第一に、ロジックが重要なのは共立性を与えることにおいてであり、メタモデル化は共立性を生産し、調整することであるため、必ずしも真新しいロジックを創建する必要はないということ。そして第二に、モルが例示している現場には確かにロジックがあるのだが、そのロジックでさえも普遍的で不変的なものではないため、遅かれ早かれ新たなロジックを作る必要に迫られるであろうということである。そのため、ロジックを創建することがメタモデル化であるのかという問いの答えは、その現場が一つのロジックを持っているのか、あるいはロジックが霧散してしまい、現場の人々が途方に暮れているのか、そのいずれの状況に介入するのかに応じて変化するであろう。したがって、「集合的な」次元で「共立性」を担保することがメタモデル化であるという本稿の主張は、それほど大きく揺らぐものではないと思われる。そこで最後に、改めて本稿のまとめと結論を述べることにしよう。

5. 結論——〈哲学研究者〉として〈現場〉に出るとは何の謂か

本稿では、ガタリのメタモデル化の概念に着目し、それが〈現場〉における具体的な問題を指し示すものであることであると同時に、それが〈現場〉に出るといふことの謂を明らかにしてくれるものであるとして議論を進めてきた。まず我々は、メタモデル化の概念をめぐる既存の研究を整理し、「集合 (collectif)」と「共立性 (consistance)」という問題と論点を提示した。次に、ガタリ自身のテキストを注釈することを通じて、メタモデル化の概念を明らかにすると同時に、それが集合と共立性という二つの問題を指し示すものであることを確証した。そこでは、メタモデル化の概念が個人や集団だけでなく「集合的な」次元に置かれたものであること、そしてそれぞれ異なる事物が何かしらのまとまりをとる共立性という状態こそ、メタモデル化の概念が指し示すものであることを示した。そして最後に、モルの具体的な記述とロジックという基礎概念を見ることによって、彼女がガタリの言うところのメタモデル化をまさに描いているということを示した。

以上の議論から、本稿はメタモデル化の概念が、現場で問題となる二つのこと、すなわち異質な要素の集まりたる集合とその集合の間の調和の問題に答えるものであり、現場で実際にメタモデル化をすることこそが〈現場に出ること〉の謂であると結論づける。

しかしながら、本稿では取り上げることも論じることもできなかった大きな問題が残っている。それは、哲学研究者としての筆者自身に関わる、ある種の実存的な問いである。すなわち、〈哲学研究者として〉現場に出るとは何の謂かという問いである。ガタリとモルはそれぞれ異なる立場で〈現場〉に赴き、メタモデル化／メタモデルを遂行した。しかし、果たしてこれは哲学なのだろうか。また、昨今増加傾向にある現場に出る哲学者／哲学研究者がそこで行なっていることは、果たして哲学なのだろうか。何を持ってしてそこでの我々の営為が哲学であると

呼ばれうるのだろうか。あるいは、現場が哲学者を要請するとはどのような事態なのか。哲学者がそこにいることの必然性とは何なのだろうか。哲学者と人類学者を区別するものとは何か。そして哲学者にしかできないこととは何か。要するに、ここで提示されている諸問題とはすなわち、「一体哲学とは何なのか」というものである。確かに、ガタリならばドゥルーズと共に、「概念を創造すること」と述べるかもしれない。彼らが述べているように、概念創造もまた共立性の創建である⁸。しかしながら、筆者はこれらの問いに即座に答えることはできない。もしかしたら、ガタリとドゥルーズが言っているように「時が来る」(Deleuze et Guattari 2005: 8=8)のを待たなければならないのかもしれないし、一生涯答えることのできないものであるのかもしれない。いずれにせよ、これらの問いは今後数十年間、筆者のうちに解けない問いとして確実に残り続けるものであるだろう。

参考文献

- A. Segovia, Carlos. (2024). *Guattari beyond Deleuze: Ontology and Modal Philosophy in Guattari's Major Writings*. Palgrave Macmillan.
- Deleuze, Gilles & Guattari, Félix. (1991/2005). *Qu'est-ce que la Philosophie ?*. Paris. Minuit. (ドゥルーズ, G・ガタリ, F. (2012). 『哲学とは何か』財津理訳. 河出書房新社.)
- Guattari, Félix. (1989). *Cartographie Schizoanalytique*. Paris. Galilée. (ガタリ, F. (1998). 『分裂分析的地図作成法』宇波彰訳. 紀伊國屋書店.)
- (1992). *Chaosmose*. Paris. Galilée. ((2017). 『カオスモーズ』宮林寛・小沢秋広訳. 河出書房新社.)
- (1985/2023). Les temps machiniques et la question de l'inconscient. *Les Années d'Hiver 1980–1985* (pp. 139–150). Paris. Les Prairies ordinaires. ((1996). 「機械的時代と無意識の問題」, 『闘走機械』(pp. 119–128), 杉村昌昭訳. 松籟社.)
- (1984) La crise de production de subjectivité, *Les Séminaires de Félix Guattari*, 03/04/1984 (URL : <https://www.editions-eres.com/blog/chimeres/03-04-1984-felix-guattari-la-crise-de-production-de-subjectivite>)
- Mol, Annemarie. (2008). *Logic of Care: Health and the problem of patient choice*. London and New York. Routledge. (モル, A. (2020). 『ケアのロジック——選択は患者のためになるか——』田口陽子・浜田明範訳. 水声社.)
- Morizot, Baptiste. (2012). Penser la concept comme carte : Une pratique deleuzienne de la philosophie, Carbone, Mauro & Broggi, Paride & Turarbek (Éd.), *La Geophilosophie de Gilles Deleuze : entre esthétiques et politiques* (pp. 73–98). Paris Vrin.
- O'Sullivan, Simon. (2010). Guattari's Aesthetic Paradigm : From the Foldings of the Finite/Infinite Relation to Schizoanalytic Metamodelisation, *Deleuze Studies* 4(2), 256–286. (URL:

⁸ 概念創造の議論については、Deleuze et Guattari (1991), *Qu'est-ce que la Philosophie?*, Paris, Minuit, chap. 1–4 と Morizot (2010) を参照。Morizot は、彼自身が現場に赴く哲学者である。そんな彼が自ら『哲学とは何か』の概念創造の議論を取り上げ、概念創造こそが哲学の実践であると述べていることに思いを巡らさないではられない。

<https://www.simonosullivan.net/articles/guattari-aesthetic-paradigm.pdf>)

- Oury, Jean & Guattari, Félix & Tosquelles, François. (1985). *Pratique de l'institutionnel et politique. Matrice*. ((2000)『精神の管理社会をどう超えるか?——制度論的精神療法の現場から——』杉村昌昭訳. 松籟社.)
- Watson, Janell. (2008). Schizoanalysis as Metamodeling. *Fibreculture journal*. 12.
(https://www.academia.edu/12893823/Schizoanalysis_as_Metamodeling)
- (2009b). *Guattari's Diagrammatic Thought : Writing between Lacan and Deleuze*. Continuum.
- スピノザ. (2018). 『エチカ』上巻. 畠中尚志訳. 岩波書店.
- 有馬景一郎. (2024). 「フェリックス・ガタリの四機能素はどう構成されているか——表現と内容のメタモデルにおけるイエラムスレウ言語素論受容の観点から」, 『社藝堂』, 11, 103–126. (URL: https://doi.org/10.57360/shageido.11.0_103)
- 井上寛雄・清水高志・米山優. (2008). 「情報学諸理論のメタモデル化」, 『日本社会情報学会全国大会研究発表論文集』, 23, 288–291. (URL : <https://doi.org/10.14836/jasi.23.0.288.0>)
- 香川祐葵. (2023). 「物語という観点から読み直すフェリックス・ガタリの思想」, 『共生学ジャーナル』, 7, 1–26. (URL : <https://doi.org/10.18910/90810>)